

4冊で4冊!

新刊新書  
サミング・アップ

なぜ日本の財政危機は解消されないのか。元財務官僚の経済学者が、日本の財政がどれだけ危機的状況で、どうすれば破綻を防ぐことができるかを正面から論じる。

もはや抜本的な財政・社会保障の改革が必要なのは明らかなのに、何とか持ちこたえているのは、将来世代へツケを回しているからだという。公共サービスから得られる受益と、そのサービス供給に必要な税金、保険料といった負担との差は、20歳以下の将来世代では、8000万円以上の支払い超過となると試算する。

財政赤字問題とは、世代間格差問題でもあるとして、将来世代に配慮した公正な税制・社会保障の枠組み構築を訴える。

財政危機の深層  
増税・年金・赤字国債を問う

小黒一正 著

NHK出版新書  
780円＋税天災から日本史を読みなおす  
先人に学ぶ防災

磯田道史 著

中公新書  
760円＋税

史料に残された「災い」の記録をひもとくと、「もう一つの日本史」が見えてくる。

豊臣政権を揺るがした天正と伏見の二度の大地震。中でも伏見地震で完全に政治の潮目が変わった。1707年の宝永地震を招いた富士山の最後の噴火は、その前に前兆の地震が5年ほど続く。また佐賀藩を「軍事大国」に変えた1828年のシーボルト台風では、藩人口の3%近くが死んだ。高速で強風を伴ったモンスター台風が満潮時の有明海を直撃した、など。

富士山の火山灰はどれほど降るのか、土砂崩れを知らせる「におい」、そして津波から助かるための鉄則とは。東日本大震災後に津波常襲地に移住した著者が伝える、災害から命を守る先人の知恵。

2014年5月に発表された、日本創成会議の報告書、通称「増田レポート」。これは、「選択と集中」の名の下に、地方を切り捨てることを是とするような論旨で書かれているという。本書は、「増田レポート」を批判的にとらえているが、批判すること自体が目的ではなく、その先にある日本の人口減少を食い止めるための方策を提言する。

社会学者の著者は、「選択と集中」に代わるものとして「多様性の共生」を唱える。この考え方は、確実に増えつつある地方へのU・Iターンといった「ふるさと回帰」によって、地方を活性化させようとするものだ。

「経済」よりも、ほかに守るべきものがあるのではないかと問いかけでもある。

地方消滅の罠  
「増田レポート」と人口減少社会の正体

山下祐介 著

ちくま新書  
900円＋税

## がんばると迷惑な人

太田肇 著

新潮新書  
720円＋税

明治以降の工業社会もそれ以前の農業社会も、肉体労働、事務作業ともに、労働時間と「頑張り」が生産性を決める2大要素だった。しかし情報通信技術が発達した1990年代以降、努力は「量」ではなく「質」が求められるようになったと著者は指摘する。さらに厄介なことに、頑張りには価値を生まないばかりか、価値を損ねかねない。脇目も振らずに一つの方向へ進もうとすると正しい方向を見失うからだ。

「努力は必ず実を結ぶ」は幻想だという組織論の専門家が、やる気を育む人事表彰制度やムダを省く技術、部下の承認欲求にこたえる管理術やチーム運営など、現代の組織が確実に成果を上げられる「合理的な手抜き」を指南する。